

# 選ばれたまち 舞鶴



五老ヶ岳公園から見える舞鶴湾

## 高い山に囲まれた天然の良港

鎮守府という名称が使われたのは明治9(1876)年ごろ。横浜に仮設していた鎮守府は明治17(1884)年に移転し、横須賀(神奈川県)で開庁。その後、22(1889)年に呉(広島県)、佐世保(長崎県)の順で開庁する中、同年には舞鶴にも鎮守府が置かれることが決定した。

鎮守府の設置が決まるまで、度重なる測量や調査、視察があり、日本海側の舞鶴、敦賀(福井県)、三國(福井県)など諸港の測量調査が行われた。そして、日本海側の中央に位置し、深く入り組んだ天然の良港と港の背後は高く険しい山があることが決め手となり舞鶴が選ばれた。諸国からの移動は船が主流だったため、湾口の狭さや山からの監視のしやすさが海軍の守りの要となる鎮守府には必要だった。

も一つ、舞鶴が選ばれた大きな理由にロシアの脅威があった。当時、ロシアの中国や朝鮮半島への進出で、日本との緊張が高まっていた。初代内閣総理大臣の伊藤博文も、戦略上の理由から、ロシアに最も近い舞鶴への鎮守府設置の必要性を指摘している。設置が決まると瞬く間に、軍港都市へと姿を変えていったのだ。



郷土資料館 館長  
吉岡 博之さん

鎮守府は戦艦の修理などがあるため、都市から離れた秘密を守れるところが適していました。当時の日本にはまだ大きな造船所がなく、イギリスやフランスなど外国に軍艦を発注して買っていました。それまで風を利用する帆船が主流だったので、波が少なく、戸島が邪魔をして入りづらい東舞鶴の港は発展していませんでした。手つかずの湾で、湾口が狭く、中に入ると湾が広く、奥に平地があり、湾を囲む高い山があった当時の東舞鶴は、軍港の整備にもってこいの場所だったんです。現在の新舞鶴小学校付近や北吸交差点付近の山裾を削った土砂や岩石で田畑や海を埋め立てて基盤目のまちができてきました。

## 海軍用地の買収と舞鶴出身の海軍次官・伊藤雋吉

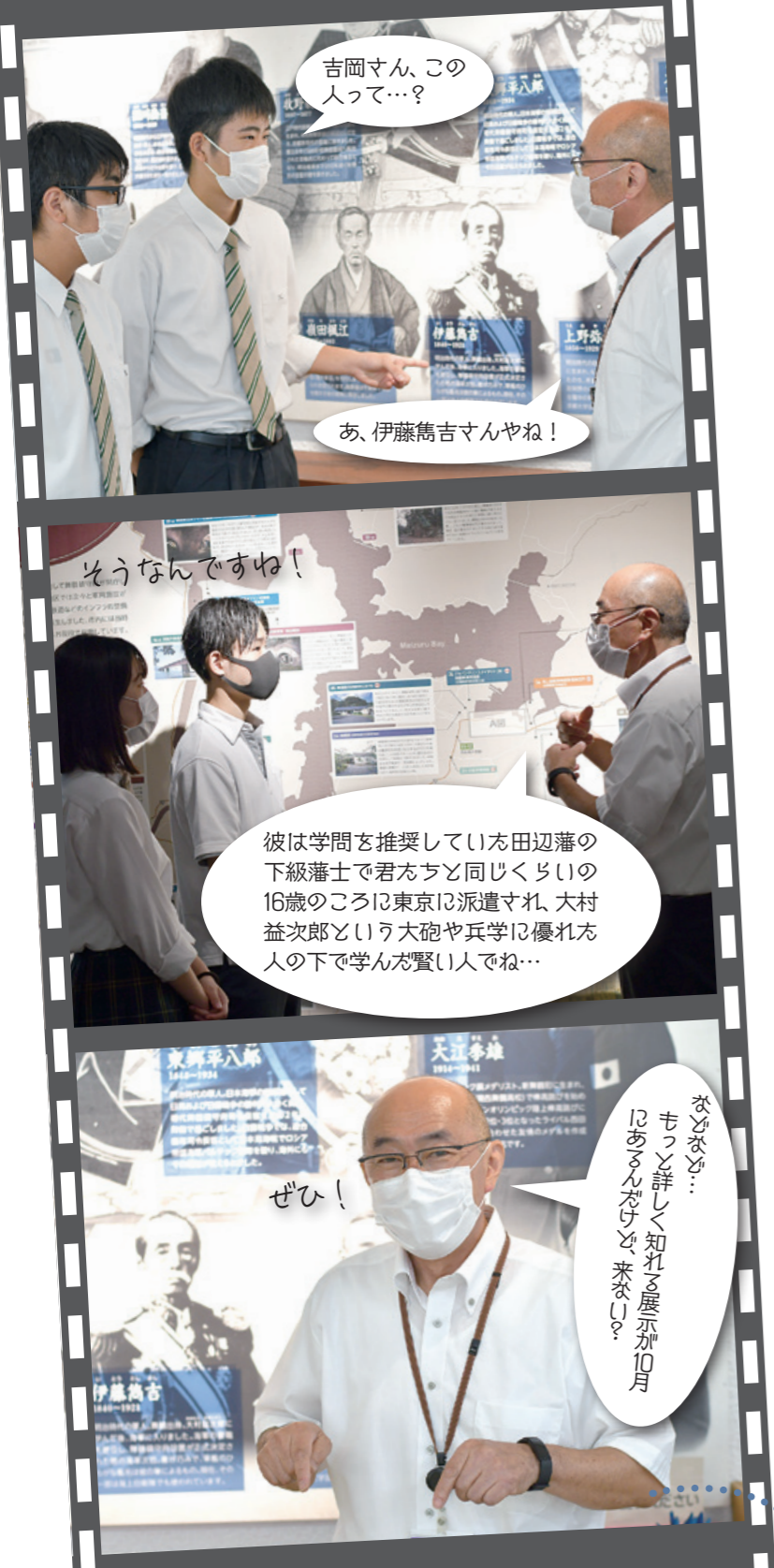
鎮守府開庁が決定し、次に待っていたのは、軍港整備に伴う村々の用地買収だった。寺川河口から市役所付近を経て余部下の約82万平方メートルが買収された。しかし、ほかの鎮守府を建設するため、舞鶴鎮守府の着工は遅れ、買収金が支払われないまま立ち退きを余儀なくされていた。この故郷の窮状を見かねて、舞鶴出身で当時、海軍省艦政局長

を務めていた伊藤雋吉が買収計画を速やかに決定。買収金が支払われ、明治24(1891)年には移転が完了した。

伊藤は、田辺藩の藩士出身で、軍艦「金剛」の初代艦長など艦長として洋上で活躍した後、海軍次官など要職を歴任し、日清戦争の戦功もあり、男爵を叙爵された。男爵以上は華族(貴族階級)と呼ばれるが、舞鶴出身の華族は藩主の牧野家と伊藤だけだった。伊藤は舞鶴鎮守府開庁の影の立役者である。



▲海軍次官・伊藤雋吉



▲海図【明治20年】  
▲六分儀(上) 軍機海図【昭和18年】(下)

海上保安庁海図150周年  
舞鶴鎮守府開庁120年特別企画  
鎮守府がやって来た!  
海の地図と伊藤雋吉と海軍

舞鶴鎮守府ゆかりの歴史資料の展示。鎮守府開庁までの経緯を、鎮守府誘致に尽力した元田辺藩士で海軍次官(中将)伊藤雋吉や関わった水路局現海上保安庁海洋情報部にスポットを当てています。

【日時】10月2日(土)〜31日(日)9時〜17時  
【場所】赤れんが3号棟

【内容】海図で見る舞鶴鎮守府舞鶴港の変遷(明治20年〜昭和20年の海図、計測機器など) ◆水路局発足と鎮守府開庁に関わった伊藤雋吉と鎮守府開庁、新市街地建設

【問い合わせ先】文化振興課 ☎66・1019